

# フランス語教育と土着語／国際語の視点

三 上 純 子

## 1. はじめに

1994年度から施行された現行学習指導要領により、中高の英語教育では、コミュニケーション能力の養成とともに、言語の背景をなす文化の学習や国際教育も教育目標としてかけられるようになった<sup>1</sup>。他方で、鈴木孝夫氏のように、日本人が主体的な英語の使い手となるためには、英語を英米の文化とは切り離した形で、国際交流語として学ぶべきだと主張する向きもある<sup>2</sup>。

フランス語についても、泉邦寿氏の主張を参考にするならば<sup>3</sup>、フランス語をフランスの文化をになった言語として見る、土着語としてのフランス語という概念に対し、フランス語のコミュニケーション上の道具性に力点をおいた、国際交流語としてのフランス語という概念をたてることができる。

本稿では、理念型として、土着語としてのフランス語教育と国際語としてのフランス語教育という対立軸を設定した場合、大学における第二外国語としてのフランス語教育をどのように位置づけることができるのか、そして、第二外国語としてのフランス語の授業における優先事項として何を挙げることができるのかを考えてみたい。なお、付言しておけば、論者は、基礎的なフランス語の運用能力の養成を、第二外国語としてのフランス語の授業の最も重要な課題ととらえている。

以下、本稿における検討は、2. 土着語としてのフランス語教育 3. 国際語としてのフランス語教育 4. 大学における第二外国語履修者の性格 5. 第二外国語教育と土着語／国際語 6. カリキュラム構成と語学授業の優先事項 7. 結びに代えて という順序で進めてゆく。

## 2. 土着語としてのフランス語教育

フランス語をフランスの言語、フランス文化をになった言語としてとらえるときの言語習得の規範はフランス人であり、フランス人のように、話し、聞き、読み、書けるようになることが目標となる。

この場合、フランス語の学習はフランス文化の学習とセットになっている。ヴァレットによれば、文化は大きく二種類に分けられるという。一つは、「文明化の歴史としての文化」であり、もう一つは「人類学的・社会的に見た文化」である<sup>4</sup>。前者は、芸術、歴史、科学などの高等文化であり、フランスで *civilisation* と呼ばれる、フランスの地理、歴史、政治制度、文学、芸術などを学ぶ科目とほぼ対応していると思われる。後者は、フランス社会の生活習慣やエチケットなどの「生活文化」であるが、こうした実質行動における文化は、コミュニケーション行動上のルールとも密接に関わっており、フランス人とのコミュニケーションに必要な社会言語学的な知識とともに学ばれる必要がある。

上記のような文化教育は、場合によっては、フランス社会の構成員として社会に統合されるための、フランス的な価値の内面化を最終的な教育目標となしうるであろう。

学習者の心理上の問題としては、フランス的な価値に同一化して、フランス人らしくなることを理想とするために、一種の自己疎外に行き着く危険性もはらんでいる点が指摘できる。

このような言語学習として考えられるのは、第二言語として、移民がフランス語を学んだり、植民地の人々が宗主国フランスの言語を学ぶときの学び方である。フランス人と同じようにフランス語を操れるようになることは、フランス社会で高等教育を受け、職業選択の幅を広げるための必須条件と言えるであろう。また、外国語として学ぶ場合には、フランスの文化、歴史、文学などを専門的に研究する人の学び方である。一つの単語、一つの社会現象を理解するためにも、フランス人のものの見方、感じ方をはじめとして、文化構造についての広範な知識を要することがあるからである。

### 3. 国際語としてのフランス語教育

英語について、鈴木孝夫氏が述べているように<sup>5</sup>、土着語としてのフランス語とは別に、独自の文法体系、語彙などをもった、国際語としてのフランス語というものがあるわけではない。フランス語の国際語性が際だつ状況があると言う方が正確であろう。たとえば次のような場面である。ベトナムで開かれた国際会議で、さまざまな国の人々がフランス語を使って議論する場合、フランス語はその場の交流言語である。フランス人をも含む各人は対等の立場で、自分の主張を表現する道具としてフランス語を使用しているのである。フランス語は国連の公用語であるし、フランス語を公用語とするフランス語圏の国々も40ヶ国以上に上る。フランス語でフランス人以外の人とコミュニケーションする機会は決して少なくはない。

このようなフランス語の国際語的な側面に注目した場合、言語の習得目標は、コミュニケーション上問題のないフランス語で、自分の考えを表現できること、さまざまな国の人々のフランス語を理解できる、ということになる。

国際語としてのフランス語に対応する *civilisation* は、フランスだけではなく、フランス語圏、さらには世界を対象とするとも考えられるし、言語の道具性だけを取り上げるならば、対応する文化は存在しないとも言えるであろう。

生活文化、社会言語学的なコミュニケーション能力については、フランス人の実質行動のパターンやコミュニケーション・スタイルを出発点としながらも、それを異文化間コミュニケーションの一つのスタイルとして相対化する視点を導入する必要がでてくる。

学習者は心理的にも、フランス人のようになろうと努力するよりは、日本人として、主体的に道具としてのフランス語を使いこなせるようになることをめざすのである。この場合、フランス語学習は、フランスの言語文化を相対化する態度を学ぶこととも結びつくのである。

#### 4. 大学における第二外国語履修者の性格

さて、以上の二つの語学教育の立場を大学の第二外国語教育のあり方との関連で検討するために、ここで大学における第二外国語履修者の性格についてみておこう。

まず確認しておきたいのは、当然のことではあるが、日本におけるフランス語教育は第二言語としてのフランス語教育ではないという点である。移民の言語教育に見られるような社会的な強い要請があるわけではない。そこで、日本人学習者がフランス語を学ぶ場合の動機は、職業上の必要、旅行や映画などの趣味といった個人的なものと考えられる。

さらに、大学において、選択必修の外国語科目として学ぶ場合は、第一に卒業に必要な単位取得という制度的な理由が挙げられる。しかも、選択必修の制度のもとでは、他の言語を学びたかったが、受け入れ側の収容能力が足りず、フランス語を履修せざるを得なかったという学習者もでてくる。

したがって、このような第二外国語履修者のクラスは、フランス語を学ぶ必然性、フランス語学習に対する熱意、フランス文化に対する関心の持ち方のどれをとってみても、とうてい均質な集団とはみなせない。大学の大衆化が進み、フランスとの交流が日常化した今日、学ぶなら対人コミュニケーションに役立つフランス語を学びたいという欲求が多数の学生たちに存在することは確かである<sup>6</sup>。しかし、これらの学習者がすぐにフランスに行き、生活するという可能性をもっているわけでもない。

また学習条件について見ると、日本では、日常生活でフランス語を使ってコミュニケーションする機会はほとんどないので、学生が個人的に他のメディアを利用して勉強しない限り、フランス語との接触はきわめて短時間の授業時間に限られる。そこで、学生の自習を含んだ効果的な学習を実現するためには、教える側は、不均質な学生一人一人のフランス語学習に対する動機付けを強化するよう働きかけてゆかねばならないのである。

## 5. 第二外国語教育と土着語／国際語

先に引いた、鈴木孝夫、泉邦寿両氏の分析によれば<sup>7</sup>、幕末、明治期から始まった日本における西欧語の学習は、進んだ西欧社会の社会制度や科学の成果の受容、移入を目的とした受信型のもので、その際、英語やフランス語は英米文化、フランス文化と切り離せない土着語として学ばれてきたことになる。

第二外国語としてのフランス語教育が、訳読式から対人コミュニケーション中心のものへと移行してきても、このフランス中心主義の土着語志向は生き続けている。

その背景には、フランス語教育に携わる教員の大部分がフランス文学を専門としており、第二外国語教育の意義を文化的にとらえる傾向が相変わらず強いという事実も指摘できるであろう<sup>8</sup>。

しかし、先に見たように、学習者の方は必ずしもフランス文化に惹かれてフランス語を選択したわけではない。第二外国語学習者は、教員の文化的な思い入れを共有するとは限らないのである。

では、国際語としてのフランス語という視点にたったフランス語教育を具体的にイメージするとどうなるのだろうか。たとえば、泉氏は受信面では、カナダのフランス語やアフリカの留学生のフランス語など、いろいろなフランス語の存在を認め、それに対応していけるような教育が必要だと説いている。また発信面では、「目標言語のモデルをフランス本国のいわゆる標準フランス語にする必要はない。」日本人くさいフランス語の使用をよしとすることが、「積極的にフランス語を自分の *langue véhiculaire* と意識して使っていくこと」につながると述べている<sup>9</sup>。

このような主張は一定のレベルに到達した学習者を対象とした場合にはわかりやすいが、初学者を対象とした授業においては曖昧な面もある。外国語の運用能力をつけるためには、まず規範が必要であり、学習者はその規範を模倣することによって言語のスキルや社会言語学的な能力を身につけてゆくのである。初歩の段階から、その規範そのものを相対化してゆくことは難しい。

したがって、第二外国語としてのフランス語学習者の学習効率という点から見ると、まず標準フランス語をモデルとするのが順当であろう。ただし、会話のモデルには、フランス人同士およびフランス人と日本人の会話以外にも、他のフランス語圏の話者も交えた会話が含まれている方が望ましい。それはフランス語によるコミュニケーションの世界の広がりを感じさせると同時に、発音上の母国語の干渉があっても、コミュニケーションはできるということを早くから学習者に意識させるために有意義だと思われる。

また、日本人くさいフランス語を使うということも、具体的にはさまざまなケースが考えられる。たとえば、談話能力についていえば、フランス人と商談する際に、話の論理構成を日本的にした場合、相手を説得するという目的を遂げることが難しくなるのではあるまいか。社会言語学的なコミュニケーションルールについても、食卓でのエチケットやパーティなどでの話題の選び方のルールなど、日本人だからフランス的なルールに従う必要はない、多文化主義に則れば、文化は相互的に認められなければならないと考えて行動したとしよう。そのとき、この話し手はそれらを不適切なコミュニケーション行動とみなされ不利益を被りかねない。

実のところ、どのようなコミュニケーション・スタイルがその場を支配するかというのは一種の権力関係である。フランス人の家庭の招待客として一人混じった日本人である場合には、フランス的なコミュニケーション・スタイルに従うべきであろう。それに対し、国際会議のような場で、さまざまな国籍の人々にフランス語が道具的に使用される場合には、フランス人もフランス的なコミュニケーション・ルールに固執することはできまい。

要するに、「郷に入れば郷に従え」というのが、コミュニケーション・スタイルの一般的な権力関係と言えるのではないか。日本人がフランスに行った場合にはフランス風の挨拶の仕方を受け入れ、フランス人が日本に来たときには、日本風の挨拶の仕方を受け入れるようにである。その意味では、初歩の学習者は、言語スキルとともにフランス的なコミュニケーション・スタイルの基本を学ぶべきである。

## 6. カリキュラム構成と語学授業の優先事項

以上の考察から、第二外国語のフランス語学習を土着語としてのフランス語、または国際語としてのフランス語と限定してとらえることには無理があると言える。フランス語学習の意義をフランス文化の精髓にふれることに求めるのは学習者の実状に即しているとはいいがたいが、フランス語をフランス文化とまったく切り離して扱うのも非現実的である。両者の視点を日本人学習者にとってもっとも有効な形で授業の中に取り込んでゆくべきであろう。

土着語としてのフランス語に関わる文化の問題から考えてみよう。まず、社会言語学的なルールについては、挨拶、tu と vous の使い分け、話し言葉と書き言葉の違いや基本的な言行為について語学の授業で優先的に教える必要がある。ただし、フランスで暮らすことを前提にした、デパート、レストランなどでの支払いの仕方、パリの地下鉄の乗り換え方、時刻表の見方、フランスの所番地の表示形式といった細部にわたる生活知識は、留学を前にした学生などに補足的な授業によって与えたり、文献紹介の形で与えたりする方が適切ではあるまいか。旅行の機会は飛躍的に増えているとはいえ、すべての学習者に開かれているわけではない。この種の授業に違和感を覚える学習者もいると思われる。

また、いわゆる *civilisation* に類する、フランスの地理、歴史、政治、文学、芸術などについても、日本語による講義の形や、文献、ビデオなどの紹介によって、関心のある学習者が学べる環境を整えることは有益であろう。文化の学習は一部の学習者にとっては言語を学ぶ動機付けとなる上、自主的に学ぶ限り、言語と文化をともに学ぶことは学習者のフランス語世界の理解を相補的に深めるに違いない。しかしながら、フランス文化をフランス語で学ぶとなると、集中的な語学教育を受けていない一般の第二外国語の学生にとっては、中級レベルであっても、容易いことではない。この点を教える側は認識すべきである。フランス語の運用能力を高めるという観点から見た場合、こうした教材が適当かどうかは議論の余地がある。ただ他方で、発信能力強化のためには、日本を

主題とした教材使用にこだわるべきだとする説もあるが<sup>10</sup>、外国語を学ぶ者の心の中に他者を知りたいという好奇心、憧れがあるとすれば、日本のことばかりを素材としたのでは物足りないであろう。教材選択にあたっては、バランスと難易度に対する配慮が重要である。

異文化間コミュニケーションにおける、コミュニケーション・スタイルの違いから生まれる誤解、文化の衝突、文化の相対性といったテーマについては、日仏の文化比較だけでなく他の文化圏や地方語の問題なども含んだ形で、日本語を主体とした講義・演習科目の中で取り上げられるのが望ましい。語学の授業と並行して、このような問題を考えることは、当該の言語文化を相対化する視点を育てる。この視点を発展させれば、コミュニケーション一般に関わる基本的な態度の育成を到達目標として設定することも可能である。

次に、フランス語の国際語性に焦点を当てたときに、語学の授業で活かすべき指導ポイントとはどんなところであろうか。

まず第一に、フランス人の標準フランス語を規範にするにしても、完璧主義を捨てるように指導することである。これは、学習者にとって、フランス語を発信するためには不可欠の心構えである。その場合、教える側が注意しなければならないのは、個々のスキルについて、どのように、またどの程度誤りを修正するかという点である。学習者が形式上の間違いを恐れて、発信意欲をなくさないように気をつけなくてはなるまい。

発音については、個々の音を正確に出すことよりも、綴り字と音の関係の学習、日本人学習者にとってコミュニケーション上問題になりやすい音の練習、イントネーションや音調などの訓練の方が重視されるべきである。

語彙、表現に関しても、フランス的なしゃれた言い回し、成句表現の習得や非常にくだけた話し言葉の学習に時間をかけるよりは、平易な表現を身につけ、それを使って自己表現する練習を行う。自分について、日本の生活について説明するためには、そのための語彙も必要になるので、たとえばフランスの食べ物の語彙を学んだ後には、日本の食文化の説明を考えてみるといった練習も効果的であろう。

このように、フランス語をコミュニケーションの道具として見ると、学力の



評価も個別のスキルの習得度によるだけでなく、コミュニケーションに対する積極性や社会言語学的な側面も含めてのコミュニケーション能力によっても行われなければなるまい。

最後に、コミュニケーション能力の養成を考える上で初歩の段階から語学の授業に取り入れるべき課題として、「コミュニケーションにおける戦術的能力」<sup>11</sup>を学ばせることを挙げておきたい。これはコミュニケーションが予期しない方向に展開しそうになったときに、それを修正して、本来の目標を達成する能力である。たとえば、相手の話がわからなかったときに、聞き返したり、綴り字と意味を尋ねたりする、焦点をあてて確認するといった行為がフランス語でできるように訓練するのである。所詮、学習者が遭遇するであろう状況や場面を網羅的に学ぶことはできない。したがって、言語の基本的なスキルとこのような戦術的な能力によって、未知の状況を切り抜けられるように指導することが肝要である。フランスに行き初めて出会う生活習慣も、最初は驚くかもしれないが、的確な質問によって確かめることさえできれば二度目からは順応してゆけるはずである。

## 7. 結びに代えて

土着語／国際語の対立軸を設定しながら、第二外国語学習者に、基礎的なフランス語の運用能力をつけるという学習目標をたてた場合の語学の授業の優先事項について考えてみた。現在の第二外国語の授業時間は決して十分ではないので、語学の授業に過大な内容を盛り込むと虻蜂取らずに終わってしまう。したがって大まかには、異文化理解のために地域文化の知識を得たり、異文化間コミュニケーションの態度を学ぶのは他の学科目で行い、コミュニケーションの技能を身につけるといふ部分を語学の授業で担当するという役割分担が望ましい。

本稿では一般論の形で論じたが、先に指摘したように、今日の大学生は、学力、学習意欲、興味関心といった面から見てきわめて多様である。それは究極

的には学習者個人に帰する問題ではあるが、その前に、個々の大学、学部の単位で考えてゆくこともできよう。すなわち、学生の学力、専門分野を前提にして、育てるべき学生像を検討し、その中に外国語教育をどう位置づけ、外国語教育に何を求めるのかを明らかにするのである。

フランス語に限らず、外国語の運用能力を身につけるには、日本語ですべてが事足りる日本のような国に暮らしている場合には相当の努力が要求される。現在の第二外国語のクラスには、そうした意識を持たず外国語学習を始める学生が多すぎる。もし、国際教育の一環として、他の地域文化を学んだり多文化主義に基づく文化の相対性について考えさせるのが主要な狙いならば、すでに述べたように語学の授業以外にも有効な方法はあると思われる。

第二外国語教育を学習者の外国語運用能力の向上のために十分機能させるためには、語学担当教員のみならず、個々の大学、学部レベルで、教育目標についての率直な議論が必要な時期に来ているのではあるまいか。

## 注

1. こうした問題意識、実践については、以下の著作を参照した。  
 佐野正之，水落一朗，鈴木龍一：『異文化理解のストラテジー —50の文化的トピックを視点にして』，大修館書店，1996（1995）。  
 萬戸克憲：『国際化と英語科教育 —異文化間コミュニケーションへの提言』，大修館書店，1992。  
 和田稔：『国際交流の狭間で —英語教育と異文化理解』，研究社，1991。  
 深沢清次，高塚成信，川尻武信，杉野直樹，川島浩勝：「異文化理解・異文化コミュニケーションを目指した英語教育」，『英語教育』Vol. 41, Sept. 1992, pp. 63-83。  
 なお、フランス語教育とフランス文化の関わりについては、以下の学術誌が参考になる。  
*Rencontres* 10, 1996.  
 『第10回フランス語教授法研究会報告』，1997。  
 『フランス語教育』27, 1999.
2. 鈴木孝夫：『武器としてのことば』，新潮選書，1985。  
 鈴木孝夫：『日本人はなぜ英語ができないか』，岩波新書，1999。  
 中山行弘：「国際語としての英語 —さまざまな背景をもつことば」，『異文化理解とコミュニケーション1 —ことばと文化』（本名信行，ベイツ・ホッフア，秋山高二，竹下裕子編著），三修社，1994, pp. 176-199.
3. 泉邦寿：「国際語としてのフランス語／特定文化の担い手としてのフランス語」，『獨

- 協大学外国語教育研究』第9号, 1990, pp. 225-229.
4. 佐野正之, 水落一朗, 鈴木龍一: 前掲書, p. 64.
  5. 鈴木孝夫: 『日本人はなぜ英語ができないか』前掲書, p. 61以下.
  6. 第二外国語としてのフランス語履修者に見られる、コミュニケーションのためのフランス語学習の欲求の高まりについては、かなり以前から指摘されている。  
Mentredon, Jacques, et Tajima, Hiroshi: "Les débutants à l'université Nouvelles perspectives", *Le Français dans le monde* N° 133, 1977, pp. 29-33.  
Asakura, Katashi: "L'État présent de l'enseignement du français au Japon", 『獨協大学外国語教育研究』第9号, 1990, pp. 405-411.  
佐藤正之: 「大学における第二外国語としてのフランス語授業の問題点と提言」, 『獨協大学外国語教育研究』第12号, 1994, pp. 21-29.
  7. 鈴木孝夫: 『武器としてのことば』, 前掲書, p. 166以下.  
鈴木孝夫: 『日本人はなぜ英語ができないか』, 前掲書, p. 82以下.  
泉邦寿: 前掲論文, p. 226.  
なお、日本のフランス語教育の歴史については、宮永孝: 『日本史のなかのフランス語』, 白水社, 1998. を参照.
  8. 『第4回フランス語教育に関する調査集計報告書』(日本フランス語フランス文学会、1991)によれば、第二外国語としてフランス語を教えている教員の多くが、フランス語教育の意義、目的を、「英語圏以外の文化との接触により人間的視野を広げる」、「知的訓練に役立つ」、「日本や日本人のあり方について考える視点を提供する」といった点に見ている (p. 17)。このような傾向は、以下の分析、議論にも読みとれる。  
北原道彦: 「大学におけるフランス語教育(外国語教育、主として第二外国語)の当面する諸問題」, 『フランス語教育』1. 1972, pp. 14-18.  
桑田禮彰, 小林正己, 杉村祐史, 中川信吾, 久松健一: 『フランス語教育を考える』, 富岳書房, 1994.  
石井洋次郎: 「広がりゆく外国語の宇宙」, 『言語』Vol. 24, 1995, pp. 28-34.
  9. 泉邦寿: 前掲論文, pp. 227-228.
  10. 鈴木孝夫: 『日本人はなぜ英語ができないか』, 前掲書, p. 118以下.
  11. 鍵倉健悦(編著): 『日本人の異文化コミュニケーション』, 北樹出版, 1995(1990), p. 166.

#### 参考文献 (注に挙げたものを除く)

- 金沢吉展: 『異文化とつき合うための心理学』, 誠信書房, 1992.  
クック, ビビアン: 『第2言語の学習と教授』, 米山朝二訳, 研究社出版, 1993.  
澤田昭夫: 『外国語の習い方』, 講談社学術文庫, 1994(1984).  
ネウストプニー, J. V.: 『外国人とのコミュニケーション』, 岩波新書, 1982.  
善本孝: 「フランス語教育と異文化理解」, *Études didactiques du FLE au Japon* N° 6, 1997, pp. 58-64.